

『大いなる遺産』における自己形成の揺らぎ — Pip と4人の父親 —

志田美佳

Charles Dickens (1812-70) の『大いなる遺産』 *Great Expectations* (1860-1) は、主人公が人生を回想する1人称形式で描かれた小説である。この作品はディケンズの長編小説としては第13作目であり、その手法はこれより10年前に出版された『デイヴィッド・コパーフィールド』 *David Copperfield* (1849-50) と同様のものである。しかし、主人公 Pip の自己のあり方、及び内面描写や主体形成の過程に関する描写は、前作のデイヴィッドの場合に比べ、遥かに上回っているといえよう。David が自分の半生における様々な出来事を、あたかも傍観者の一人であるかの様に受け止め、意識的に或は無意識的に問題に関わる事を避ける人物として描かれていたのに対して、Pip は David と違い、当時の社会的規範となる人物ではなく、様々な誘惑に打ち勝つことができないという弱い部分を持ち、そしてまた、物事の善悪を判断しているか否かは別として、内観し、行動せざるをえない人物として描かれている。

Angus Wilson は著書、*The World of Charles Dickens* (1970) の中で、

The self in *Great Expectations* came from a much deeper, more bitter, and yet finally more secure, level of his review of his own life. (1)

と、ディケンズの自己と絡めてこの二つの作品を比較している。作者の自己形成が作品に及ぼす影響も十分考慮しなければならないが、本論では、自己形成に重要な役割を担う父親の存在を軸に『大いなる遺産』の主人公 Pip の自己形成の過程を考察するものである。

(1)

『大いなる遺産』は、幼い Pip がテムズ川下流の沼地地帯にある教会の墓地で、自分と両親を認識するところから始まる。Pip は両親を墓石に書かれた墓碑銘から連想し、その墓石の下で震えながら泣いているのが自分であると認識する。その墓場から、脱獄囚であるマグウィッチ (Magwitch) が現れ、Pip に食料とヤスリを調達するよう指示する。マグウィッチに両親の所在を尋ねられた Pip は、“There, sir!” I timidly explained. “Also Georgiana. That’s my mother.” “Yes, sir,” said I, “him too; late of this parish.” (1:5) と墓石を示す。実際、Pip を育てているのは、彼の姉とその夫のジョー・ガージャリー (Joe Gargery) である。物語の冒頭から Pip を導く者、つまり彼の父親役は一定せず、彼のアイデンティティの確立が不安定であることを暗示している。これから述べるように、Pip には父親と呼べる存在が4人いると考えられる。墓石に刻まれた実の父であるフィリップ・ピリップ (Philip Pirrip)、Pip の姉夫婦であり、事実上の育ての親であるガージャリー夫妻、そしてマグウィッチである。

では、父親とはいかなるものであろうか。佐々木孝次は著書『母親・父親・掟』の中で次のように言及している。

ところで父親という象徴は、人間にそのような行動を促すうえでかなめになる機能を果たすものと考えられる。つまり、子供が、生まれ落ちたひとつの社会環境のなかで現実に行われているさまざまな基本的な思考に積極的に自分を参加させていくための意識を発達させ、それによって同じ社会の他の構成員との関係のなかで共同の行動をしていく。そういう意識は、子供にとって基本となる価値意識、狭義の道徳意識、役割意識などさまざまな面を含んでいるが、父親はこのような意識を発達さ

せるうえで、子供がいつもそこに準拠するための規範を提供する。そのさい子供は、父親の存在と切っても切れない規範を内面化するといわれる。(2)

同様に Erich Fromm は *The Art of Loving* (1956) において、次のように述べている。

The child, after six, begin to need father's love, his authority and guidance. Mother has the function of making him secure in life, father has the function of teaching him, guiding him to cope with those problems with which the particular society the child has been born into confronts him. (3)

つまり、父親とは子供が正常な人間として社会に対応し、他者の中で自己を確立していくという過程において、必要欠くべからざる存在なのである。人格を形成する手助けをし、善悪の規範を示すはずの父親の存在が Pip には欠如している。物語の冒頭から不安を抱え、盗みに対する自責の念に苦しむ Pip。しかし、彼を取り巻く人物達の中で、父親の役割を示す人物がいないわけではない。この小説において Pip の実父は実際に登場することはないが、墓地と沼地という物語全体を包んでいるイメージとして、終始、Pip の人生の象徴として関わりあっていくことになる。では Pip にとって実際に父親の役割を果たすべく存在する人物とは誰であろうか。

まず、Pip の姉、Georgiana の夫で、鍛冶屋の Joe Gargery について検討してみたい。彼は、幼い Pip のよき理解者であり、姉の暴力から Pip をかばう人物でもある。Joe の人物像は Pip によって次のように表されている。

Joe was a fair man, with curls of flaxen hair on each side of his smooth face, and with eyes of such a very undecided blue that they seemed to have somehow got mixed with their own whites. He was a mild, good-natured, sweet-tempered, easy-going, foolish, dear fellow — a sort of Hercules in strength, and also in weakness. (2:8)

子供の頃の Pip は Joe を、共通の受難者、または大きい子供で、わたしと同じもの、つまり、二人は対等者であると考えていたが、Joe の素朴で、実直な美徳は幼い Pip も認識している。この頃の二人の関係は、Joe の女性的な概観からしても、父親と息子というより、母親と幼い息子の十全関係を思わせるものである。それを再認識させられる場面は、後に Pip が遺産相続の見込みに敗れ、病に臥した時の場面に見ることができる。

…and Joe stayed with me, and I fancied I was little Pip again. For, the tenderness of Joe was so beautifully proportioned to my need, that I was like a child in his hands. … Joe wrapped me up, took me in his arms, carried me down to it, and put me in, as if I were still helpless creature to whom he had so abundantly given of the wealth of his great figure. (57: 466-467)

このように、母の愛に包まれた子供のように Joe の優しさを再び満喫している Pip であるが、かつて Miss Havisham の Satis 荘で出会った Estella から、“With this boy! Why, he is a common labouring-boy!” “He call the knaves, Jacks, this boy!” “And what coarse hands he has. And what thick boots!” (8:60)と言われ、労働者階級であることを蔑まれると、それまで Pip が築いてきた価値観はもろくも崩れ去ってしまう。そして自分を紳

士的に育ててくれなかった Joe をも疎ましく、また恥ずべき人物だと思
い込む。鍛冶場は、大人になり、独立独行するための輝かしい大道だと
信じていた。ところが、たった1年のうちに、事情は完全に一変してし
まった。今はそんなものは粗野で下等なものとなった。わたしが変わっ
てしまったのである、と Pip は心情の変化をさらけ出している。また、
この先、Mrs.Joe や、Magwitch に対しても同じように繰り返し現される
のが、Pip の父親像に対するアンヴィヴァレンツな感情である。

…and that the plain honest working life to which I was born, had
nothing in it to be ashamed of, but offered me sufficient means of
self-respect and happiness. At those times, I would decide conclusively
that my disaffection to dear old Joe and forge, was gone, and that I
was growing up in a fair way to be partners with Joe…when all in a
moment some confounding remembrance of the Havisham days would
fall upon me, like a destructive missile, and scatter my wits again.
(17: 132)

このように Pip の不安定な自己は、確立前から崩壊の要素を含んでい
るのであるが、このような両面的な態度のうちにある子供の状態は、い
わゆる「エディプス期」として説明することも可能であろう。(4)

さらに匿名の人物からの遺産相続の見込みの話が舞い込み、ロンドン
で生活するようになると、利己心の追及と、育ての親である Joe に対す
る軽蔑的態度に拍車がかかる。Pip に会うために上京してきた Joe に対
し、もし金で彼を遠ざけておくことができたとしたら、わたしはきっと
金を出したことだろう、と忘恩の念を Pip は感じるのである。Joe も二
人の中の空気を感じ取る。そして二人は一緒になるべきものではないが、
自分は正しいことをしようと思う、と Pip に言い残し、その場を去る。

Pip は Joe の威厳を認めるが、その場で彼に伝えることは出来なかったのである。Joe に対するこのアンヴィヴァレンツな感情は、最後まで Pip の心から消えることはない。そして両面的な感情を Pip が抱いているにもかかわらず、Joe は妻の弟である Pip の父親として存在することはないのである。Joe は Pip の母親的人物として、一人の友人として、また Pip の心理的な十字架として存在し続けることになる。

(2)

次に Pip の姉、Mrs.Joe に関して考察してみたい。彼女は Pip の実の姉である。20歳以上も離れているため、両親亡き後、Pip を“by hand.”つまり「自分で手塩にかけて」育て上げたというのが彼女の口癖である。しかし、彼女は当時の理想的な女性像である「家庭の天使」とは対極にいる女性であり、Pip の育て方からも女性としての愛情をうかがい知ることができない。その容貌にしても、Joe が色白で、なめらかな亜麻色の巻毛であり、眼は非常に淡い色をしている（第2章）のに対して、彼女は「黒い髪と黒い眼」を持ち、「肌が一体に非常に赤い色」をしており、「背が高く、骨ばって」いる（第2章）女性として描かれている。さらに、その容貌は Pip の想像する、亡き父親の姿、「黒い縮れ毛をした、角ばった、がっしりした体つきの、色の浅黒い男」（第1章）にはほぼ一致する。先にも述べたが、Pip を愛し、保護するという母親の役割は Joe にあてがわれている。その為 Mrs.Joe は、母性愛や母性的役割を拒否した姿として、存在することになる。田中孝信は「Pip には超えるべき父親がおらず、超えるべき存在は母親の役割を拒否した女性なのである。彼の経験するエディプス・コンプレックスは陽性ではなく、同性の親への愛と異性の親への嫉妬と憎しみという陰性の形を取る。彼は

「象徴的父」を乗り越えるという経験を持たない。彼の人格の構成と欲望の方向づけの基本となるのは、母親の役割を担う優しい男性との擬似母子関係に基づく、同性愛的関係となる。幼児体験がもとで、彼はそういった男性に受動的に依存するのである。主体性確立から尻込みし、前エディプス期に執着する彼は、根本的に大人になり切っておらず、ナルシズムに浸る子供としての側面を残している」(5)と考えている。確かに、姉の肉体的な暴力、さらには精神的な暴力が原因で、Pipの人格形成、主体性の確立に歪みが生じたという事実は否めない。これはPip本人も物語の中で、次のように述べている。

My sister's bringing up had made me sensitive. In the little world in which children have their existence whosoever brings them up, there is nothing so finely perceived and so finely felt, as injustice. ...Within myself, I had sustained, from my babyhood, a perpetual conflict with injustice. I had known, from the time when I could speak, that my sister, in her capricious and violent coercion, was unjust to me. I had cherished a profound conviction that her bringing me up by hand, gave her no right to bring me up by jerks. Through all my punishments, disgraces, fasts and vigils, and other penitential performance, I had nursed this assurance; and to my communing so much with it, in a solitary and unprotected way, I in a great part refer the fact that I was morally timid and very sensitive. (8: 63)

では、彼はこの姉の存在、または Joe との擬似母子関係の間の障害物となっている他者、つまり象徴的父親を超えることは出来なかったのだろうか。引用で述べたように、確固たる信念を持ちつつも、彼の怒りは表面的には彼女に向けられず、「抑圧」という形を取ることになる。

Joe の鍛冶場には、Orlick という Pip より年上の男がいた。彼は常に Pip の行動を偵察し、自分の待遇と Pip のそれとを比較し、妬んでいる人物である。Orlick もまた Mrs.Joe と敵対していた。その後、Mrs.Joe は何者かによって、鈍器のようなもので背中と後頭部を殴られ、病に伏し、障害を持つ身となる。事件現場に到着した Pip は、そこに来る前に聞いていた芝居の話が影響していたのだが、姉に対する加害事件に自分が何か関係していたに違いない、と罪悪感を持つ。犯人は Orlick だと確信しているにもかかわらず、Pip は彼に対して曖昧な態度を取り続ける。つまり、『デイヴィッド・コパーフィールド』において、デイヴィッドの隠れた自我を表していたのが Heep であったように、Pip の内面の闇を表している人物が Orlick であるとも考えることも可能であろう。Pip が抑圧した破壊的なエネルギーは、Orlick によって顕在化することになる。物語の終盤で、Pip は Orlick に呼び出され、殺されかける。その時、Orlick は Mrs.Joe の事件について次のように言うのである。

“I tell you it was your doing — I tell you it was done through you,” …
 “I come upon her from behind, as I come upon you to-night. I giv' it her! … But it wasn't Old Orlick as did it; it was you. You was favoured, and he was bullied and beat. …” (53: 426)

Pip の意識下にあった「自分も何か関係している」という感覚は、姉に対する破壊的衝動が彼の内面に存在していたと受け取れる。実際に手を下したのは分身の役割である Orlick であった。これは暴力的で恐怖と権力の象徴であった父親を、兄弟で殺害するというフロイトの「トーテムとタブー」理論に沿うものであろう。姉が亡くなったとき、Pip が感じるアンヴィヴァレンツな感情、

Whatever my fortunes might have been, I could scarcely have recalled my sister with much tenderness. But I suppose there is a shock of regret which may exist without much tenderness. (35: 278)

と言う感情も、父親を殺害した後の兄弟たちの事後服従（6）という心理状態で説明できそうである。事後服従とは、父親を殺害し、その地位を奪取して願望を満たすと、今まで父親に対して向けられていた愛情が、後悔という形になり、兄弟の元へ帰ってくる。さらにこの後悔に対応して罪悪感が成立し、内面化されることである。今後の研究の対象として注目すべきことは、先にあげた Orlick の言葉が、まさに父親殺しがテーマとなっている、ドストエフスキー（Fyodor Dostoyevsky）の『カラマゾフの兄弟』*The Brothers Karamazov*（1880）において、実際に手を下したスメルジャコフ（Smerdyakov）が次男のイワン（Ivan）に言う言葉と同様のものであるということである。

（3）

続いて、Magwitch と Pip の関わりについて考えてみたい。脱獄囚である Magwitch は物語の冒頭で、Pip の実の父親の墓地から姿を現す。Pip に食料とヤスリを盗むよう示唆する人物である。この事件以後、彼は常に墓地、沼地というイメージと結び付けられ、Pip の生涯に影響を与え続けるのであるが、このイメージは Pip の実父と重なるものである。さらに「盗む」という行為と、「罪人に加担する」という行為によって、Magwitch は幼い Pip に「自分は罪人である」という一つのアイデンティティを植え付けることになる。罪悪を知りつつ、黙認する姿は、姉に対する Orlick の傷害事件のときにも見られるものである。しかし、この罪

人のイメージは Pip の自己形成において、姉や叔父である Pumblechook の Pip の扱いによってさらに増幅されたものなのであるのだが。

Pip に遺産相続をする人物は、Miss. Havisham であり、Estella と結ばれるのは自分である、という幻想によって自己の物語を Pip は作り上げていたが、第39章において Magwitch が命の危険を冒して Pip に会いに来ることにより誰の遺産であるか明らかになる。この場面でも Magwitch は沼地や墓地と結び付けられている。

I knew him! Even yet, I could not recal a single feature, but I knew him! If the wind and the rain had driven away the intervening years, had scattered all the intervening objects, had swept us to the churchyard where we first stood face to face on such different levels, I could not have known my convict more distinctly than I knew him now, as he sat in the chair before the fire. (39: 315-6)

さらに、Magwitch は次のように Pip に話す。

“Look’ee here, Pip. I’m your second father. You’re my son — more to me nor any son. … In every single thing I went for, I went for you. ‘Lord strike a blight upon it,’ I says, wotever it was I went for, ‘if it ain’t for him!’ …” (39: 320-1)

Pip にとって父親であると自ら告げたのは Magwitch ただ一人である。加えて、Pip を紳士階級の社会へと導いたのも彼である。自分の作り上げた物語の崩壊とともに、Pip の自我も崩壊してゆく。

… I thought how miserable I was, but hardly knew why, or how long I had been so, or on what day of the week I made the reflection, or even who I was that made it. (40: 329)

と、アイデンティティの喪失をあらわにする Pip であるが、所詮、Pip のそれまでの自己形成は自分の作り上げた物語をもとに、虚構の上に築き上げられていたのである。遺産相続の見込みが消え、初めて自分が Joe に対して行ってきた数々の忘恩行為を Pip は悔いることになる。また、Magwitch 自身が紳士階級と自分を比べて感じた屈辱は、Pip が Estella に対して感じたそれと、同じものであったのである。Pip と Magwitch は同じ夢を抱いていたと考えられよう。

Magwitch の再来は、当初、Pip に恐怖と嫌悪感しかもたらさなかったが、彼の生い立ちを聞かされるにつれ、徐々に別の感情が Pip の中に生まれるのである。“He regarded me with a look of affection that made him almost abhorrent to me again, though I had felt great pity for him. (42: 352) と、Magwitch に対するアンヴィヴァレンツな感情が芽生え始める。加えて、すべてを失った Pip は Magwitch を無事に国外へ逃がすという使命を頼りに再び自己形成という作業に取り掛かるのである。その中で、嫌悪の対象として Pip の心を支配してきた Magwitch であるが、彼の生き様は Pip の内面に新たな動きを与えることになる。Magwitch を匿う日々が終わり、その上、綿密に計画した逃亡が失敗に終わり、彼は再び裁判を受けるために投獄されることになる。しかし、彼は宿敵 Compeyson との戦いで、致命的な傷を負っているのである。以下に挙げる引用は、計画失敗後の Pip の Magwitch に対する気持ちである。

We had a doleful parting, and when I took my place by Magwitch's side, I felt that that was my place henceforth while he lived.

For now, my repugnance to him had all malted away, and in the hunted wounded shackled creature who held my hand in his, I only saw a man who had meant to be my benefactor, and who had felt affectionately, gratefully, and generously, towards me with great constancy through a series of years. I only saw in him a much better man than I had been to Joe. (54: 446)

ここに至り、Pip は Magwitch を善良な父親だと認めることになる。それまで Pip の意識の中で、Magwitch は抑圧の対象となっており、否定してきた人物であった。フロイトは「否定」に関し、「判断においてなにかを否定するとは、根本的には〈これは、わたしがもっとも抑圧したいことである〉ということの意味する」と述べ、さらに「判断が下す特性とは、本来は善いか悪いか、有益か有害かという特性であり、…要するに、〈それをわたしの中に入れる〉〈それをわたしの中に入れない〉の区別である。…原初の〈快感—自我〉は善いものはすべて取り込み、悪しきものはすべて排除しようとする」(7) と述べている。つまり、自我にとって悪しきものとは、自分にとって異質なものであり、抑圧を要する有害なものである。Magwitch に対し、Pip は自我への進入を頑なに拒んできたのだが、最終的に Pip が下した判断は、Magwitch を善と認め、彼を自分の中へ入れる、つまり、同一化するという結果をもたらしたのである。この同一化によって、父親像に対する不安定な感情、及び父親不在によるコンプレックスの為に、今まで揺らいでいた Pip の自己は確立の様相を示すことになる。それまで Pip は自分にとって何が真実で、何が偽りであるかの判断さえ出来ずにいたのだが、第二の父、Magwitch によって自分の存在理由を明確にされ、Pip の主体性確立に新たな変革がもたらされたことは否定できない事実となる。

(4)

以上に見てきたように、父親的役割をする人物と、Pip の揺らぐ自己形成の関わりについて考察してきた。Joe とその妻である Mrs.Joe の役割の逆転によって、Pip は長い間、自己確立ができずにいた。それは、Joe との擬似母子関係、また、Mrs.Joe の傷害事件における、原父殺害のストーリーとも受け取れる Pip の行動となって現れる。加えて、亡き父親の墓地で出会った、Magwitch は、Pip にとって恐ろしく、自身の中の罪人のイメージと結びつき、嫌悪すべき存在であったが、事あるごとに、Pip の人生に象徴となって現れるのであった。そして、Pip は送り主も判らぬまま、遺産相続の見込みによって、紳士階級へと成り上がる。しかし、それは Magwitch の作り上げた物語の一端に過ぎず、結局、虚構の中で自己確立を行ってきた Pip の主体性はもろくも崩れ去ることになる。彼の人生そのものが砂上の楼閣であったのである。とはいえ、Magwitch の偽りのない Pip への思いが、Magwitch を受け入れるという、父親との同一化を促進し、彼の内面に新たな光を灯す。それまで、無意識のうちに遠ざけていた真実を Pip は受け入れる。Magwitch は第二の父親として、Pip の自惚れや、忘恩行為に喝を入れる役割を果たす。これは、先に述べた、父親はその子供が生まれてきた特殊な社会が彼に直面させる問題にうちかつことを教え、指導するという機能を持っている。(59) という Fromm の理論を裏付けることになるであろう。

この時点で、Pip の自己確立は成功したように考えられる。しかし、これを阻止する者が存在する。それは、作者 Dickens である。この物語は、上記で述べた人物達と、Pip の関わり他に、Miss.Havisham や Estella と Pip の男女関係における葛藤の世界が展開している。幼い Pip の素直さや、価値観を一蹴した彼女たちに、彼は生涯苦しむことになる。ことに、Estella への希望のない愛情は、Pip の真実を見る眼を終始曇ら

せているのである。Fromm は *The Heart of Man* (1964) において、“In many individuals this faith is shattered at an early age. . . . It is always the faith in life, in the possibility of trusting it, of having confidence in it, which is broken.” 「大抵の子供は幼い時に、信頼感を粉砕される。破壊されるのは常に人生に対する信頼であり、人生を信じ、人生に信頼をおくことの可能性に対する信頼感である。」とし、また、そういう体験に対する反動の一つとして、“Often he overcomes his despair at having lost faith in life by a frantic pursuit of worldly aims — money, power, or prestige.” 「往々にして世俗的な目的—金、権力あるいは名声—を気狂いのように追求することによって、人生に対する絶望感を克服しようとする」(8)と言及しているが、これはまさに Pip の人生そのものであろう。さらに Fromm は、“The narcissistic person will be prone not to believe that the woman does not love him. . . . “She loves me unconsciously; she is afraid of the intensity of her own love; she wants to test me, to torture me” 「自分に反応のない女性に恋をするのは、ナルチシズムであり、そのような男性は「彼女は無意識に僕を愛してはいるが、僕の愛情が烈しいのを恐れていて、僕を試し、苦しめたいのだ」(9)と女性の反応を自己の中で合理化する。そのような人は、他人の現実が自分の現実とは違うということ認識できない」と述べている。つまり Pip の Estella への想いは彼のナルチシズムの結果であると考えられよう。父親との関わりにおける主体性の揺らぎは克服したものの、女性に対しては、自己確立ができぬままの Pip が存在するのである。この Pip の不安定さは、ブルーワー・リットンの助言によって、物語の結末を変えるという Dickens の曖昧さも関与していると解釈しても良いかもしれない。当初、Dickens が考えていた結末は、Pip が完全に Estella を失うというものだった。しかし、変えられた結末の方が、Pip と Estella の将来を、より不明確なまま残し、Pip の自己確立自体にも、そのあいまいさを残してしまってい

る。大いなる遺産相続が見込みのまま終わったように、Pip の総合的な自己確立も結果を見ないまま、幕を閉じることになる。

*本論は、サイコアナリティカル英文学会、第31回（平成16年度）大会に於いて口頭発表したものに加筆修正を加えたものである。

テキスト

Charles Dickens. *Great Expectations*. Penguin Classics, 1996. 引用文末の括弧内に章と頁を記した。

注

- (1) Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. London: Penguin Books, 1970, p.270.
- (2) 佐々木孝次、『母親・父親・掟』東京、せりか書房、1985、p.57.
- (3) Fromm, Erich. *The Art of Loving*. New York: Harper&Row, 1956, p.40.
- (4) 佐々木、p.58.
- (5) 田中孝信、「母性への渴望」、松村昌家編、『チャールズ・ディケンズ『大いなる遺産―読みと解釈』東京、英宝社、1998、p.247.
- (6) 高橋義孝 他訳、ジークムント・フロイト、『フロイト著作集 第3巻』京都、人文書院、1969、p.271.
- (7) 竹田青嗣編、中山元訳、ジークムント・フロイト、『自我論集』東京、筑摩書房、1996、pp.297-8.
- (8))Fromm, Erich. *The Heart of Man*. New York: Harper&Row, 1964, pp.29-30. 鈴木重吉訳、『悪について』東京、紀伊国屋書店、1965、

pp.26-7.

(9))Fromm, p.68. 鈴木 pp.83-4.

参考文献

Brooks, Peter. *Reading for the Plot*. Oxford: Clarendon, 1984.

Dostoevsky, Fyodor. *The Brother's Karamazov*. London: Penguin, 2003.

Pykett, Lyn. *Charles Dickens*. London: Palgrave, 2002.

新野 緑、『小説の迷宮—ディケンズ後期小説を読む』東京、研究社、
2002

SYNOPSIS

The Waver of Self-formation in *Great Expectations*: Pip and Four Fathers

Mika Shida

Charles Dickens's *Great Expectations* (1860-1) is his thirteenth novel and his second one depicting the adventure of a boy's growth to manhood. Like *David Copperfield*, it is narrated in the first person who is the protagonist. But the protagonist, Pip is characterized more dependent on Dickens's experience of his own life. Angus Wilson compares it with *David Copperfield* and says that the self in *Great Expectations* came from a much deeper, bitter, and yet more secure review of his own life.

Moreover, an aspect of father who bears some relation to Pip's self-formation is described more clearly in the novel than in *David Copperfield*. The relationship between father and son is a main point in this novel.

The purpose of this study is to search for Pip's self-formation and self-understanding which are related to his four fathers. The first is Pip's real father who has been dead already, the second is Mr. and Mrs. Joe and the last is Magwitch a prisoner who has delivered foods and a rasp to Pip.

Finally, it is to be brought to light that Pip's confusion of his father is born from Dickens's confusion itself.